

2008年矢作川「川会議」講演記録

多摩川紙芝居

中本 賢

矢作川の日は5月の第2土曜日、2008年は5月10日となりました。朝からの本格的な雨にもかかわらず、午前中の「子どもあまご釣り大会」の参加は92名、午後から古岸水辺公園にて行われた「2008年矢作川『川会議』」には250名もの参加者がありました。

今年の川会議のテーマは「魚から見る矢作川 - Let's ざこ会談 -」。中本賢さん（俳優）が「多摩川'紙芝居」, 新見克也さん（矢作川水族館メンバー・矢作新報記者）が「矢作川水族館紹介」, 阿部夏丸さん（矢作川水族館館長・作家）が「雑魚がおしえてくれたこと」と題してそれぞれ御講演いただきました。

その後は「Let's ざこ会談」。「川オヤジたちが、川と雑魚を語る」と題し、パネラーには引き続き中本賢さん、新見克也さん、そして奥山英治さん（写真家）、山本敏哉さん（矢作川研究所研究員）をパネラーに、阿部夏丸さんのコーディネートで会談は進められました。

急遽設けられた会場の雨避けテントには時折雨音が激しく叩きつけましたが、テントの下は笑いと熱気に包まれ、夕刻に入ってから交流会にも余韻が残りました。交流会の出店は8店、参加者は183名。心配した雨の影響もなんのその、「2008年矢作川『川会議』」は成功裏に終わりました。

矢作川研究所では月報『Rio』2008年7月号（No. 121）にて川会議の特集を組み、阿部夏丸さんに「魚の視点で川を見る」という文章をいただき、中本賢さんの講演記録の一部を紹介しました。

ここに掲載する講演記録は、テープ起しした原稿に中本さんご本人が直接目を通してくださり、紙面でも講演の様子が伝わるように加筆修正して下さったものです。

心に残る普通の川・矢作川

安心しました。みなさん、色が黒いんですね。私も黒いんですが、芸能の仕事をしておりますので、どこに行っても色の白い人ばかり。この黒さに「賢さん、海外のどこに行ったの?」と聞かれます。「多摩川」ってなかなか言いにくいですね、職業がら。やっぱりみなさん川に行ってる頻度も多いんだなって、色で感じます。

「Let's ドン・キホーテ」っていうテレビ番組を14年やりました。あちこち川を中心にやりましたが、矢作川が僕の心に残っているのは、すっごく普通の川なんですよ。僕、普通が好きです。特別はつまらない。それでいて川に入ると鮎はたくさん居るし、川底は砂だし…。矢作川、とっても気になっていました。

近くて遠い多摩川

今日は矢作川を愛してやまないみなさんに、僕が東京の多摩川で面白おかしく遊んでる様子をお伝えできたらと思ってます。番組でもそうでしたが、あんまり人が価値観を見出してない場所に、わざわざ出かけて面白がって見せる…。まあ捻くれ根性が心の中にありまして…。

多摩川は東京と神奈川、日本で一番人口が密集しているところを流れる川ですから、矢作川と違うのは、流域人口が極端に



多い。430万人の人が暮らしています。人が多いから、流れている水も大体7割が下水なんですね。川って言っても川の水なんか流れちゃいないんです。これは年の平均数値での割合ですから、渇水期だとほぼ100%下水の川になっちゃう。したがって下水処理が施されていない時代は洗剤の泡で川が全部埋まっちゃってました。多摩川は川によく似た排水溝なんです。

僕が川遊びを始めた1980年代ごろから下水道の普及率がだんだん上がってきて、6割くらい超えたあたりから泡がだんだん消えました。でも、その頃は川で捕れる雑魚もほとんど奇形していました。急激な環境汚染で魚のほとんどが絶滅しましたが、生き残った魚も大半が背骨が曲がっているか、見た目で見分ける奇形が起きてました。大変だったんでしょうね、魚も…。

1956（昭和31）年、僕は東京の浅草ってところで生まれました。高度成長期、環境汚染の一番ひどいときで、故郷の隅田川は真っ黒の墨汁みたいな水がコンクリートの隙間を流れていました。僕はそういうところで育ったんです。

多摩川沿いに引っ越したのは撮影所に近いからです。多摩川には何の興味もありませんでした。でも当時、家の子どもがちょうど遊びたい盛りで、少しずつ子どもと一緒に多摩川へ行くようになりました。魚釣りとかして、川には誰も居ませんでし



だから、一人占めですよ。近所の人は多摩川に魚がいることも知らないようでした。と言うか…関心がない。実は洗剤の泡の下に鮎もいっぱいいたんですけれど、知らない。たまに居る釣り人も、鮎は放流するから居ると思っている。人がこんなにいっぱい近くに住んでいるのに、多摩川は相変わらず「近くて遠い川」のままでした。

春の川原は面白い

画用紙に絵を描いて、紙芝居を作りました。それで、小学校の総合学習の時間を貰い、子どもたちに川の面白さを伝えています。今の時期は「春の川原は面白いよ」って川原の遊びを紹介します。川遊びっていうとすぐに魚釣りと思う人が多いんですが、そうじゃないぞお、川原の春はすっごく面白いぞあって…

(ここからはマイクから離れて大きな声で) 普段はマイク使わないんですよ。でっかい声でやる方が気持ちいい。

僕はこの多摩川の隣で暮らしています。川のことを東京の子どもだから知らないっていうわけではありません。地方行くと東京の子よりもっと知らない子が多い。「よい子は川で遊ばない」って旗が出ているのは、実は地方の方が今だに多いんです。

(写真を指差して) この花は川原に咲く花では、春一番、最初に咲き出します。花の大きさは5ミリくらい。雑草です。多摩川では2月下旬に咲きます。この花、雑草ですから名前が面白いんですよ。可憐な花なんですけれど、その後に出てくる実の形が由來になって、オオイヌノフグリっていうんですね。でかい犬のタマキン袋という名前。笑っちゃいますね、下品で…すみません。子どもたちには…下ネタがないとね。

雑草ですから、面白い下品な名前が他にもあります。皆さん知っているでしょうか？この花、手にとって匂いをかぐと名前がわかるんですね。ヘクソカズラ(屁糞蔓)っていいです。屁とウンコの臭いがするんです。きつと昔の農家のおじさんが、畑で手についた匂いをかいで「このッ、屁糞ヤローッ！」って言ったのが由來なんじゃないかな。

つまり春はお花屋さんだけに来るとじゃない。みんなの暮らしている横の川原にもいっぱい来てるよ、そんなことを伝えたい下ネタです。すみませんね、雨の中…

キジ卵、孵化大作戦

家の真ん前の中州で、キジがよく鳴きます。私の名前を「ケーン、ケーン」って気軽に呼んでいる。春、このキジの雌が卵を抱えています。ある日、見に行くと、川に来る人が全部草を刈ってしまって中州でゴルフをやっている。卵が置いてきぼりになっています。急いで卵を持ち帰って、息子と二人で雛が生まれなにかやってみました。題して「キジ卵、孵化大作戦」。

当時、長野で鶏の有精卵をそのまま手で持って孵化させたというニュースがあったんです。でも雌の卵が孵化するためにはいろいろ条件がある。温度で39.5℃、日数22日間。孵化させるなら風邪を引き続け、ずっと39℃の高熱を出してなきゃいけない。体温で孵化させるのは無理、諦めました。

結局、クーラーボックスにヒヨコ電球を入れて、卵を置く装置を作りました。息子と一緒に、ヒヨコ電球で暖めます。でもそのままだと茹で玉子になっちゃうんで、熱帯魚のサーモスタットを突っこんで、温度の管理をしてもらいます。水槽じゃなくても、空気もちゃんと39度にキープするんですね…。優れモノです。卵の横には温度計を入れておいて、それでも怖いから6時間ごとに目覚まし鳴らして転卵する。

最初のうちは息子と奪い合いで、「俺やる俺やる」って転卵してましたが、3日くらい経つと飽きちゃう。「おまえ行け」「お

父さん行ってよ」なんてね…。妻はなんてバカなことしてるんだって顔してたくせに…。母性本能ってすごいですね。6時間おきに夜も朝もブンブン怒りながらも転卵を続けてくれました。23日目、雛が誕生しました。



感動しました。息子が「ねえお父さん、卵がガタガタしてるよ」って言うから見に行ったら、雛が出てくる。くちばしの先に見えないような角が出ていて、卵を一周ヒビ入れた後、地鶏ですから立派な足でそのまま殻を蹴り破って、「バーン」って、ホント爆発するみたいに出てくるんです。

中井貴一って俳優が「ビルマの豎琴」で肩にオウムを乗せてましたが、中本賢は多摩川で手乗りキジ乗せてる…ってのもイイですね。その後、餌やるときにはいつも笛鳴らして餌付けしました。本当に来るんです。可愛いですね、これは。多摩川でも出来ると面白い。

大きくなって、猫にやられないよう中洲で放鳥しました。そして楽しみにしていた餌付けの成果を試してみました。…でも戻ってくるワケないですね。野生はそんなに甘くない。

春は地面からやってくる

2月下旬、寒い時でも子どもらと地熱探検隊っていうのをやっています。花の咲いている地面を測ると30℃くらいある。石の横はもっと温度が高い。アスファルトから大根の芽が出たなんて驚いていますけれど、地熱探検隊だったらわかるんです。暖かいから芽が出るんです。

早春のタンポポ。終わると梅が咲き始める。そして桜。だんだん春は地面から上がっていきます。そんな探検を川原でします。「春はどこから来るんだろう」って、結構オモシロイですよ。

多摩川には放流するから鯉がいっぱい居ます。でも四畳半で象を飼っているようなもんですよ、多すぎる…。鯉はどこに産卵するでしょう？東京の子どもも三河の子どもも知らないですね、多分。昔は田んぼの稲や細流の水草なんかには粘着性の卵を産みつける。でも多摩川に水草なんかありません。

じゃあ、どこに卵を産むかという、なんと川底に落ちてる「ゴミ」に卵を産んでる。子どもたちとコレで遊びます。家からゴミ持ってきて川に沈め、一番卵がついた子が勝ちというシュールな遊びです。

鯉は人工物が好きです。これ、ブルーシート。数ヶ月川で漂ったものは、ほつれてモサモサしています。お母さん鯉がお腹をつけても痛くない。「あー、鯉はモサモサが好きなんだ。」こいつが分かると、卵がついたゴミが探しやすくなります。

多摩川にはありとあらゆるものが落ちています。でも、卵が



一番多く付くのがコンビニ袋。矢作川ではどうですか？でも、自然があってもビニールがあるとビニールに卵を産む…。なぜかは知らないですけど。

1枚のビニール袋でだいたい3万から3万5千の卵。全部持ってくるとこの水産業者だつて言われますから、ちぎって持って帰って下さい。だいたい5日で孵化します。虫眼鏡で観察してみると、何にもない透明の卵の中から背骨が出てきて、目が出てきて、心臓が出てきて…。凄いですね、生命って奴は。

5月の上旬、鯉のぼりが空を泳いでいる同じ時期に、横のゴミ川で命がいっぱい生まれている…。何にも語らなくても、これは多くを子どもたちに伝えていきます。

暮らしの中の大切な川

紙芝居の最後にやるネタです。絵を見せて「川では境目が3つある、どれか判るか？」って聞きます。川の境目、1つ目は陸と川の境目で、川の真ん中の深いところからだんだん浅くなってくる。そういうところには必ず抽水植物帯っていうのがあって、これを「ガサガサ」と呼びます。ちっちゃい魚や体力のない魚が生活する場所。たとえば小さいのが川の真ん中を泳いでいたら、一発でやられちゃいますね、大きな魚に。

2つ目は水と空気の境目「水面」。これは魚にとってどんな役割があるかという、ご存知のとおり、ブクブク入れない魚は必ず水面が上がってきますね。酸素は空気と触れることで水の中に溶け込んで来る。水面は酸素を取り入れる境目です。

じゃあ3つ目は何かといいますと、川と陸の地面の境目、つまり「川底」です。川底には石がある。石に太陽の光線が当たると表面がヌルヌルしてきます。ヌルヌルした珪藻がつくと、川虫がいっぱい出てきますよね。川底は魚たちの食料生産基地なんです。

ただ、川の横の人は暮らせない。境目のしっかりした川の横には、神社があって水神様が祀ってある。護岸なんかしてないから、増水すると全部流れちゃう。怖い川なのに人々は離れない。増水して冠水した田んぼが、翌年いっぱい米が取れる。怖いけど有り難いことも沢山あった。岐阜辺りに行くと、古くからの輪中だとか舟屋だとかが見られます。

最近の川は、近いと困ることばかりを気にして整備されています。増水しても平気なように河床を掘り下げて、フェンスを建てる。匂いが始めるとフタをしちゃう。簡単管理を目指して三面コンクリートの川にしちゃいます。魚に必要な境目は当然無くなっちゃいますよネ…。

おかげで怖さが無くなり、今では川の横でも暮らせるようになりました。そして誰も川に関心を持たなくなった。自分のウ

ンチをどこに流してるか知らないし、蛇口から出てくる水、どこから出てきてるんだかも知らない。そんな暮らししておいて、地球の裏側のペンギンを心配している。そんなことより、お前の横の川を心配しろって言いたいですね。お前のウンコがどこ流れるのか、そこにどんな生き物が暮らしているのか、すこしは関心持ちやがれーッ！…ってことです、ハイ。

地球温暖化の勉強も必要だけれど、まずはあなたの暮らしている一番大切な水環境に関心持つことからやり直さなければいけませんネ…。みんなが川の怖さだけでなく、川の楽しさを理解できるようになれば、必ずいろいろな素晴らしい動きになると思います。

僕たちのバトンを繋ごう

多摩川が1970年代から比べ、きれいになったポイントは何かと言うと、人がいっぱい来たってことです。皆さん信じられないかも知れませんが、多摩川には年間にだいたい2000万人の人が遊びに来る。多くが竿を持たない近所の人です。散歩したり野球やったり…。とにかくわんさか人が来る。

たくさん人が来ると、川を気にする人も増えますよね。ゴミが流れると、管理事務所に通報する。臭いが出ると、これまた通報。管理事務所も大変ですが、実はこれが再生のきっかけになりました。どうにもならない大きな問題は、市民活動家や市民が立ち上がり行政を動かします。多摩川の流域住民は日本一うるさい。でも、行政も様々な施策を生んでそれに応えています。やっぱり市民が関心を持つってえーのが大切ですね。

「川会議」のみなさんが、世間に「矢作川はおもしろえ」と触れ回り、普段川に来ない人をどのように川に来させるかが大切です。釣りをしなくても面白くて価値がある場所、…そこそこ目覚めさせることが大切なんだと思います。そうやって集まる人は素人ですが、やがて新たな矢作川の価値観を生み出すかもしれない大切な人材です。継続する活動は次々と未来を生み続け、100年後には我々では思いつかない素敵な矢作川をドンドン作り出すと思います。

僕たちはそのためのバトンをリレーする活動を続けなければいけません。こんなに陽に焼けた黒い人たちが居るんですから、大丈夫です。もっと凄い矢作川にしなければいけませんネ。この、ありきたりな「普通の川」で頑張ってください。

いつの日か交流が出来るといいですね、普通同士で…。気合入れてください。箱根の向こうから、力いっぱい応援しています。

.....

中本賢さんは精力的に自分の手にしたバトンを次の世代につなげようと活動されています。

詳しくはHP「多摩川クラブ」

<http://members3.jcom.home.ne.jp/ken195665/> をご覧ください。

文責：遠 志保